

『ゼロカーボンに取り組む適疎な町宣言』【パブリックコメントの結果について】

■募集の趣旨 二酸化炭素の排出により、温室効果ガスが増加し、地球温暖化の原因とされています。地球温暖化が進むことにより、様々な気候変動が引き起こされ、近年、大型の台風や局地的な豪雨災害も発生し、生態系にまで影響をしています。このまま地球温暖化が進むことで、豪雨、洪水、干ばつ、熱波、森林火災などの頻発、海面の上昇や高潮による沿岸部や平野部の一部での転居、食料・水不足、生態系への影響などが懸念されています。

こうした気候変動への対応として、2015年12月に採択された「パリ協定」によって2020年以降の温室効果ガス排出削減のための国際的な枠組みが規定され、2021年11月に開催されたCOP26では、1.5℃目標に向かって世界が努力することが正式に合意されこの目標を達成するための取組が世界全体で加速化しています。

東川町では、ゼロカーボンに向けた取組みを加速させることで、自然豊かな地域を未来へ繋ぐこと、将来の世代も安心して暮らすことのできる持続可能な社会を実現することを目的に、この町で暮らす一人ひとりが「共に」、温室効果ガス排出の抑制に努める「ゼロカーボンに取り組む適疎な町宣言」について、ご意見を求めたものです。

■意見募集期間 令和4年2月14日(月)～3月4日(金)

■意見内容

1	<p>ゼロエネルギー住宅（ZEH）を建て来春には移住する予定で、カーボンニュートラルの生活を実践しようと考えていたので、カーボンゼロ宣言の趣旨に大いに賛同します。東川町を移住先に選んでよかったです。太陽光による発電と蓄電、ペレットストーブでカーボンニュートラルを目指します。この宣言に対して何か役に立てることがあれば協力させていただきます。</p> <p>この先、風を生かせそうであれば、小型の風車による発電ができないかとも考えています。太陽光発電ができない夜間や冬期の発電を補完して、カーボンニュートラルをカーボンゼロに近づけるために。（もちろん風車は東川町の景観と調和する前提です）</p> <p>最後に、カーボンゼロ宣言に合わせて助成制度の拡充を検討していただければと思います。</p>
2	<p>1. 車の暖気運転を短くする広報を</p> <p>ゼロカーボンへの取組みとして、我々町民が簡単にやれることは何かと考えたときに、私が一番に思い浮かぶのは車の暖機運転を短く済ますことです。</p> <p>特に冬は、車内が十分暖まるまでたっぷりエンジンをかけっぱなしにしている方を北海道では多く見ます。</p> <p>現在の車はオートチョークになっていて、エンジンのかけ始めはアイドリングが高まり、自動でエンジンの暖機運転が行われますが1分ほどでアイドリングが下がり暖機運転は終了し、発進できる状態になります。昔の車ほど暖気運転を必要としません。つまり車のための暖気ではなく、自分が寒いための暖気運転なのです。</p> <p>しかし上着を着ることや、膝掛けを車内に置いておくなどの対策で無駄な排気ガスを放出せずに済む話です。また、スーパーなど買い物の際も、エンジンを切らずに駐車している車も散見し、個人的に気になっています。これらのアイドリングストップを注意喚起するようなことを広報誌などを通じて行って欲しいと要望します。環境に良いとされる車に買い換えるのは高額出費を伴うことから容易ではありませんが環境のために上記のように今やれることは簡単なことだと思います。</p> <p>2. 町職員が率先して行う取組み 徒歩通勤など</p> <p>次に提案させていただきたいのは、役場職員が率先して何かに取り組めないかということです。具体的に浮かぶのは、現在車通勤の規定があるのか承知しないまま書きますが、近距離在住の者は車通勤ではなく徒歩通勤に切り替えるということです。昼食をとり昼休みに帰宅する方が多いようなので、難しいところかと思いますが、町として今回宣言をする以上、職員が率先してゼロカーボンに取り組む姿勢を見せる必要があるように思うのです。</p> <p>宣言と同時に、「町職員は何々に取り組めます」と模範になるようなことをやっていただけたら、宣言も意味深いものになると思われます。隈研吾氏も「ウォークアブルな町」と言われているところでもあり、町内は歩きましょうという取組みや周知を行って欲しいと思います。この宣言が、町民に浸透し、実行力を持つためには町民に先立って行うアクションが必要だと感じる次第です。</p> <p>3. 家庭用の太陽光発電パネル設置費用の補助制度</p> <p>数年前の停電で水道のない各家庭で、水がくみ上げられないという切実な局面に出くわしました。</p> <p>今後の災害の備えにも有効な、家庭用の太陽光発電パネル設置費用の補助を行っていただければと思います。（もしかしたら以前にあったかも知れませんが）ゼロカーボンへの取組みにも有効だと思います。</p>

3	<p>1. 『ゼロカーボンに取り組む適疎な町宣言』に関する意見</p> <p>①東川町がこのような宣言を出すことに大賛成ですし、誇りに思います。他の自治体へも広がり、大きな動きにつながることを期待します。</p> <p>②一方で、「宣言」のような発信においては、昨今のSDGsウォッシュなどと批判を受けないように、細心の注意を払うべきだと思います。たとえば、電通が発行しているSDGsコミュニケーションガイドなどに記載されているような注意事項はいまいちどご確認いただいたほうがよいと思います。</p> <p>2. ゼロカーボンに対する取り組みの提案</p> <p>①上記1-②の観点からも、東川町らしい、東川町の強みを生かした施策は必ず入っているべきと考えます。具体的には、農業残渣、特に米のもみ殻などの処理の施策は入れるべきと考えます。秋のせつかくのさわやかな日に畑や田での残渣の焼却による煙が漂うことはイメージダウンにつながりますし、いくら他の施策でよいことをしても、そこを対応していなければ、叩かれる可能性もあります。</p> <p>②同じ観点で、おいしい水を来訪者に飲んでいただくために、ペットボトルによる販売だけではなく、マイボトルに詰めて飲んでいただける場所を街中にも設置してはいかがでしょうか？マイボトル使用によるプラスチック製品削減の啓蒙につながるのではないのでしょうか。</p> <p>③車の利用を減らすために、また町の風景をゆっくり利用していただくために、自転車でめぐる・徒歩でめぐるしかけをもっと積極的にしてはいかがでしょうか？特に平地の多い地形を生かして、自転車めぐりスポットの設置をしてもよいかと思えます。</p> <p>④町民の車の利用もたいへん多いように感じています。乗り合い循環バス（できればEV）のようなものを走らせてはいかがでしょうか？</p>
4	<p>◎宣言文案につきまして</p> <p>宣言文は、温暖化による様々な弊害を伝えつつ、課題解決に取り組むことで、豊かな地域を未来につなごうとする意志が感じられる内容だと思いました。</p> <p>東川町で暮らす私たちがそれぞれの立場で取り組むために、『この町で暮らす一人ひとりが「共に』』のあとに【責任を持って】というひとことがあれば、より強いメッセージになるのでは？と感じます。</p> <p>◎宣言後の取り組みについて</p> <p>ゼロカーボンの実現に向けた計画策定や、既存の地球温暖化対策実行計画の改定、エネルギー効率の高い機械等の導入、廃棄物や消費エネルギー削減、マイバックの使用、LED化などは、有効な取り組みと考えますので、すべて賛同いたします。</p> <p>上記取り組みの実現のために、まずは東川町での温室効果ガス排出量の現状を把握する「見える化」と、町民（関係人口も含む）への現状共有が必要と考えます。</p>
5	<p>○東川町でゼロカーボンに取り組む適疎な町宣言がされることに町民として賛同します。</p> <p>個人の努力で解決できるレベルの課題ではないとの世界的認識の中、行政が市民と共に計画を実行することは必須であり、速やかに対策を打っていくには必要な取り組みだと考えます。</p> <p>○次に宣言の中身に対する意見です。</p> <p>宣言後に町が取り組むこととして「ゼロカーボン実行計画策定」、「ゼロカーボンビジョンの推進」がうたわれています。</p> <p>しかしながら、その前段階に必要な現状の把握、目標の設定を行う工程に関しての記述がありません。</p> <p>第1期東川町地球温暖化対策実行計画（第2期分は確認できず）では巻末に町内「施設別エネルギー使用量」が記載されていますが、現在ではもっと細やかな自治体内の使用エネルギーの分析が可能になっています。（環境省地球温暖化対策地域推進計画策定ガイドラインには市町村別エネルギー消費統計作成のためのガイドラインがあります。また東川町では数年前に産業連関表を作成したのでここからもより現実的なエネルギー利用の形が見えるはずです。</p> <p>そのデータをもとにIEAや政府が見据えている目標に対してのアプローチを組み立てることが長期的に見てロスのない戦略になると考えます。時間と投入可能資源は多くありません。最低でも1年程度の策定会議を実施しそれをもとに実行に移すべきと考えます。</p> <p>○3つ目に東川町におけるゼロカーボン戦略に対する個人的な提案です。</p> <p>取り組みの方向性として大きく分けて3つが考えられます。①小エネルギー社会の構築。②脱化石燃料。③炭素の固定です。</p> <p>①小エネルギー社会への変化と技術の利用</p> <p>北海道においては移動と熱利用の改善の余地があります。車の省エネルギー性能を上げる以前に車に依存しない街づくり（東川町ではすでにコンパクトシティとして取り組みは開始）、再生可能エネルギーの導入よりも熱効率の高い住宅の建設。</p> <p>これらは技術の進歩を待つまでもなく政策としてすぐに実施可能です。前者は町の賑わいを、後者は快適な住環境をうむうえ、共にウエルビーイングを向上させることが明らかになりつつあります。</p> <p>私たちの利用エネルギーの約1/4は運輸に使われています。一か所で大量に生産し、世界中に流通させる仕組みに頼りすぎることはリスクが大きいことが今回のパンデミックで露見しました。過度に外部依存しない。地域内で無理なく生産できるものはできるだけ生産する。レジリエンスの高い、地消地産（地産地消ではない）型の暮らしへの転換が始まっていると考えます。</p> <p>すでに東川町は都市から多くの移住者を迎え、来るべき社会の住まい方を実践できる自治体だと考えます。余暇を使って我が家と共に荒廃した山林の手入れを行くことで炭素を固定し、薪の利用で化石燃料に頼らない暮らしをつくらうとする若者もいます。</p>

	<p>具体的な提案としては、農村部における多世帯混住型の集合住宅建設、既存建築物の省エネルギー化、木製高断熱サッシの製品化、町内食品事業者からの食品ロスの飼料化・肥料化、施設園芸において加温しない中国式温室の導入。</p> <p>②脱化石燃料は地方が豊かになる時代への幕開け</p> <p>現在私たちはエネルギーの多くを海外に依存し、暖房、移動のために多くの支出をしているがその多くが域外へ流出している。それらを地元資本の再生可能エネルギーに転換した場合この資金の多くが町内に還元される。手元にある資料では平均家庭一戸あたりエネルギー支出は27万円/年（2019年北海道石油システムセンター調べ）東川の世帯数が約4000戸なので家庭内での消費支出のみでも町内で10億円程度を支出している。これには自動車、産業用電力・軽油などは含まれない。</p> <p>2021年に農水省が出した「みどりの農業システム戦略」では「化石燃料に代わる乾燥調製方式を2020年代半ばから実証試験に入る」ことが明記されている。一方現在農協で計画中のCEではそのことに対する検討が明記されておらず対応が急がれる。また同戦略では「2040年をめどにトラクターなどの電動化」を工程表に入れているが、すでにアメリカでは電動トラクター、重機は実用化され、アマゾン出資による大型車両に特化した電動車両メーカーが誕生している。他国からは遅れているが日本でもクボタが2024年に小型のものから市場に投入する。これらが進んだ時、農家は自分の敷地で発電し、充電した電力で営農が可能となる。</p> <p>具体的な提案としては、営農型太陽光発電を利用した自己託送型町内電力融通システム（現在事業化準備中）、太陽光発電ヒートポンプ・森林端材のバイオマスハイブリッドの蓄熱システムによる小規模エリア熱供給、地熱利用、用水路・小規模河川による小規模水力、圧縮空気による蓄電（揚水発電よりも小規模開発で済み、低コスト。アメリカでは実証実験開始）、忠別川河川敷利用。</p> <p>③植物による炭素の固定</p> <p>樹木としての炭素固定のみならず植物の根が貯える炭素の大きさが再評価されており、2021年に農水省でだされたみどりの農業システムでも不耕起栽培、裸地での緑肥利用は推進されている。</p> <p>農業を柱の一つとしている東川町としては未来志向で取り組む価値がある。</p> <p>具体的な提案として、農地への有機質・バイオ炭の投入（堆肥、バイオ炭などの土中の炭素分を使用して微生物が窒素やリンを利用できる形に変えているが、化学肥料栽培では炭素を土中に還元しなくても栽培可能と考えられている）、有機物マルチ、不耕起栽培、荒廃山林の手入れ（山林の適正な生育が炭素の固定につながる）、山林内の下草や遊水池の畦畔などを羊・牛・山羊による管理、畦畔の草地管理。</p> <p>最期に、具体的な提案に関しては長くなるので箇条書きにした。また、どれが優位性があるかは多角的に検討するべきだと思う。</p> <p>IEAの2021年の報告書では、2030年までに現状の技術で大幅な削減を実行し、それ以降は新技術で対応を詰めるロードマップを選択しないと2050年にゼロカーボンは困難であると表記されています。以下の文献にもあるように現在ある技術で対応可能なことは多くあります。2050年ゼロカーボンが達成可能か否かは効率良く手順を踏むことだと考えます。</p> <p>2050年は地元にある資源を生かして地元の人間の暮らしが豊かになる。年配の方々にとってはどこか懐かしくもある、新しい技術に支えられるレジリエンスな社会にすることが私たち世代の責務だと考えます。</p>
6	<p>東川町に移住して丸2年が過ぎようとしています。住環境は本当に素晴らしく、旭川市内に通勤している身としては、毎日の帰宅が楽しみで仕方ありません。この様々な「環境」の素となっているのは、やはり地球環境だと思います。</p> <p>個人的には、以前から自然に対する意識を高くもっており、あくまでもできる範囲で、可能な限り持続可能な生活をしてきたつもりです。その根底には、やはり現在ではなく未来を考えて生きていきたいという考えがあります。また、職業上、それを子ども達に伝え続けていくことも使命だと思ってきました。</p> <p>大好きな東川町が、この宣言を掲げることを、こころからうれしく思います。世界中に数多ある形式だけの宣言ではなく、より中身のある「生きた」宣言にするためには、教育（というと堅苦しいですが、より良い未来をめざすためには教育へのアプローチが不可欠であり、そこには勇気が必要だと思っています。）を通して幼児期から「ゼロカーボンが当たり前」という感覚になるような過ごし方ができることが大切だと思います。うちの娘が、外出先で「やっぱり東川の水はおいしい」としみじみ語ったり、コスタリカの子が「民主主義って当たり前」と言いながら選挙をお祭りのように楽しんだりするように、みんなの「当たり前」になって、初めて宣言の意味があると思います。幼児センターや学校だけではなく、社会教育としての観点からも世代を問わず推進していくことも大切だと考えます。</p> <p>また、一人の住民として考えた場合、その大半を過ごす家庭、または家そのものは、何よりの教育の場だと思います。これからの家づくりにおいては、環境性能のより高い住居を東川の新たな基準としていき、そのための補助金を設けたり、地元産材の利用を積極的に進めたり、ソーラーパネルであれば、比較的広い土地を利用して、屋根だけではなく個人でも野立てで設置できるようにするなど、長い目で見たときに価値の高い教育効果、環境効果があるのではないかと思います。個人的には、何年か前から「エコロンシステム」という次世代型の浄化槽も気になっており、こういったものが水を大切に使う東川町でも他の浄化槽と同じような扱いで広まってくると、私が他の町に住んでいるなら、「これはマジだな…」と鳥肌が立ちます。</p> <p>第4回地域と暮らしのゼロカーボン勉強会「みんなでやってみよう！コンポストで生ごみの堆肥化」   Hakuba SDGs Lab (hakuba-sdgs-lab.org) <a href="http://hakuba-sdgs-lab.org/events-210624#07">http://hakuba-sdgs-lab.org/events-210624#07</a></p> <p>もちろん、EVやPHEVといった自動車関係（農業用も！）に対する補助金や、充電スタンド・家庭用コンセントの設置等も、適疎の東川だからこそ積極的な展開が可能なのではないかと思います。そしてそれがソーラーシステムと連動していたら、なおステキです。</p> <p>みんなで考えると、素晴らしいアイデアが次々と生まれてきそうです。本質を見極め、環境と未来と子ども達のことを本気で考える東川を、もっと大好きになれそうでわくわくします。</p>
7	<p>ゼロカーボン化についてはゼロカーボンを推進するまちづくりに向けた自立・分散型エネルギー基盤として、分散エネルギーシステムを束ね、効率的にマネジメントする仕組みが必要であると考えております。</p>